

**FROM  
BATHROOM  
WITH  
MY LOVE**



**R18**  
Adult Only

夏だ







今日の  
晩飯なに？

なあ

やだね

もっかい!!!

ああ

もう  
腹減ったし  
あちーし



からあげ

食う  
だろ？



食う

夏休み  
サイコーだな！

しばらく  
会わねえから



は？





えっ……？



火神大我の  
サイコーな夏休み  
終了のお知らせ

ちーん









まあいいです  
君達が仲良く  
なるのは  
僕も嬉しいので



というか  
君達いつの間  
にそんなに仲良  
くなったん  
ですか

…え？  
あー…

じえら、



青峰くんが？



すみません  
やっぱ  
むかついたんで



…わき腹…



本当になにも  
思い当りませんか？

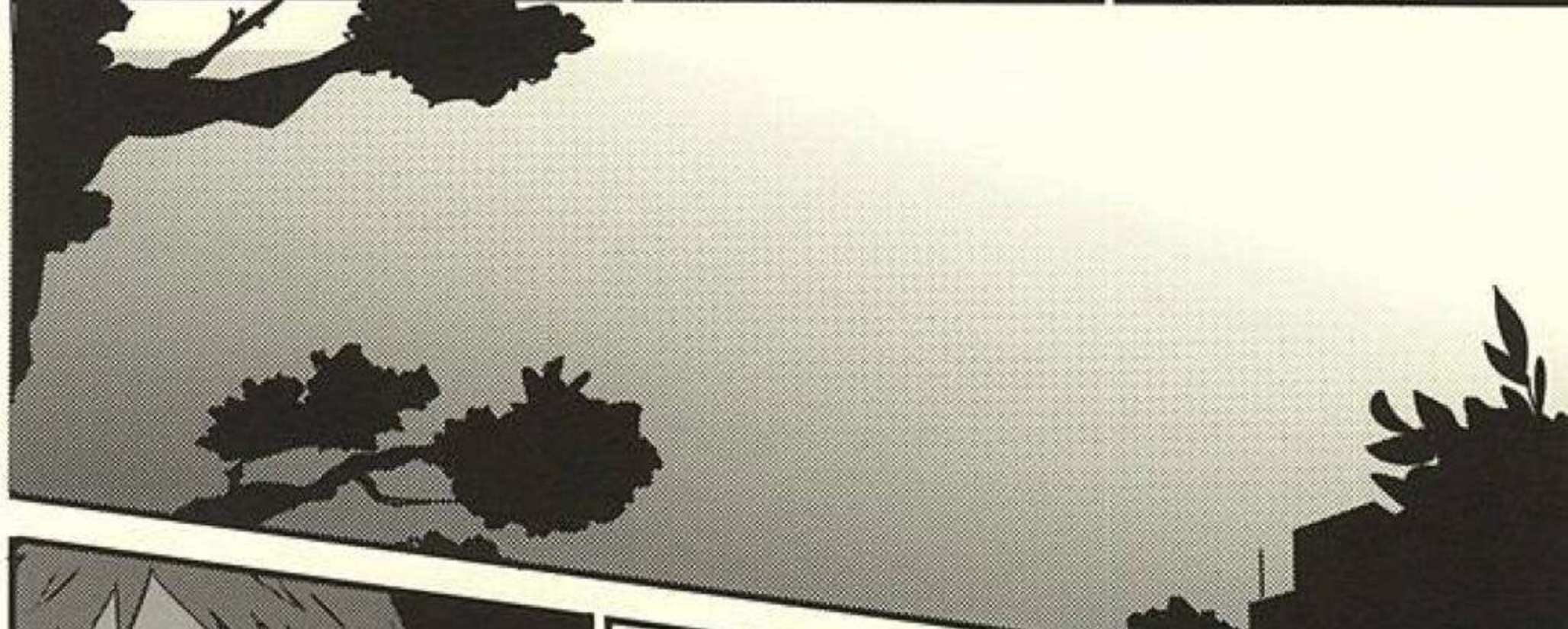
青峰君がそう  
言い出す前は  
何をしていたか…

夕飯食う前…？



でもー

青峰君がなんの理由も  
なしにそんな風に  
言わないと思うんです





イヤイヤ!!!  
聞く!

よし!



ほるとせえよな

キキキ

キキキ

さっきまで  
泣いてたくせに!  
おばさまに聞いて  
知ってるんだから!

泣いて  
ねえし!

青峰が泣いて……?  
もしかして桃井は  
俺たちのこと知って……?

このままじゃ  
ダメに  
なっちゃうよ!?

つか  
忘れてたのに  
思い出させ  
んな!

そのつもりで  
こーしてんだよ!

もう知らない!  
大ちゃんの  
ばか!

NOLの試合…  
録画予約し忘れてた

…あ  
や入…





——つたく  
さっきのやつ

人が折角薬飲んで  
痛えの忘れてた  
つーのによお……







おんじやん

結局  
一週間  
持ち歩いて  
しまった

おんじやん

おんじやん

いねーのかよ  
くっ

ガチャ  
ガチャ

ガチャ

おんじやん  
なんだ

…なにしに  
来たんだよ青峰

もう  
会わえんだろ

…  
火神

なんだよ

ドア開ける

やだね



ってーな!

ケツ打つた  
だろー!

アホ峰



いいから開ける



火神、おい

…なんだよ  
これ…

まさかー



ズン



泥棒か!!!?

ツッ

ちげーよ



なんかに一方的に  
分かんないよ!  
言はうとよ!  
俺はなぜだ!  
からな!

青峰が  
悪いんだろ!?

...っ

火神...?

トスト



はああああ!!?

? ?  
? ?

俺別れるとか  
言つたっけ?

会わねえよ  
お前



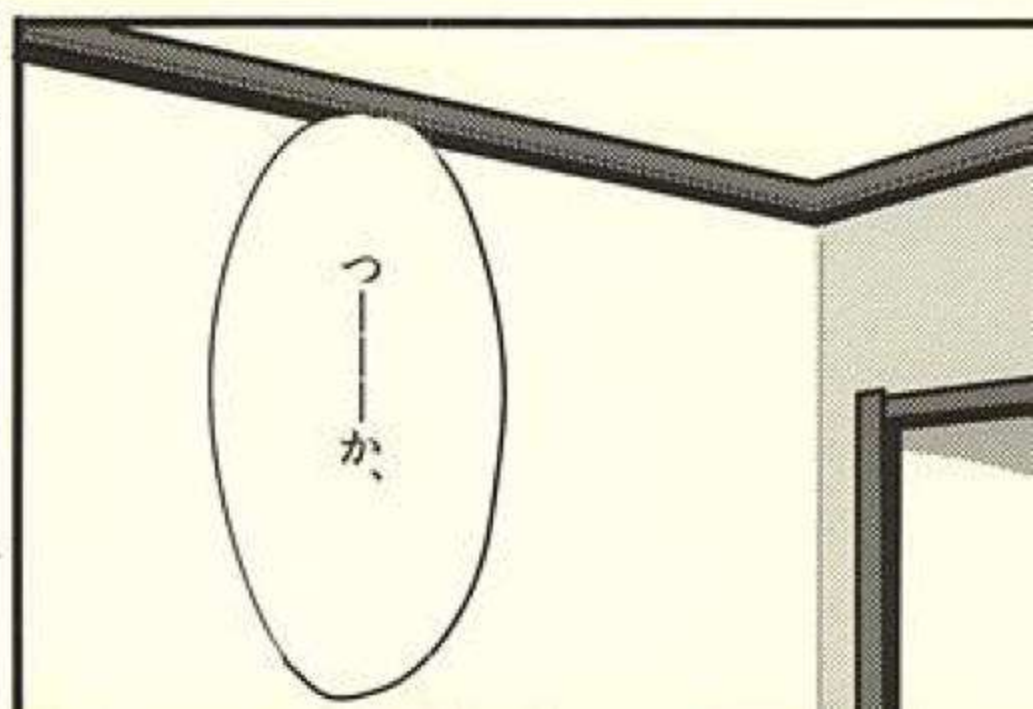
かがみ...

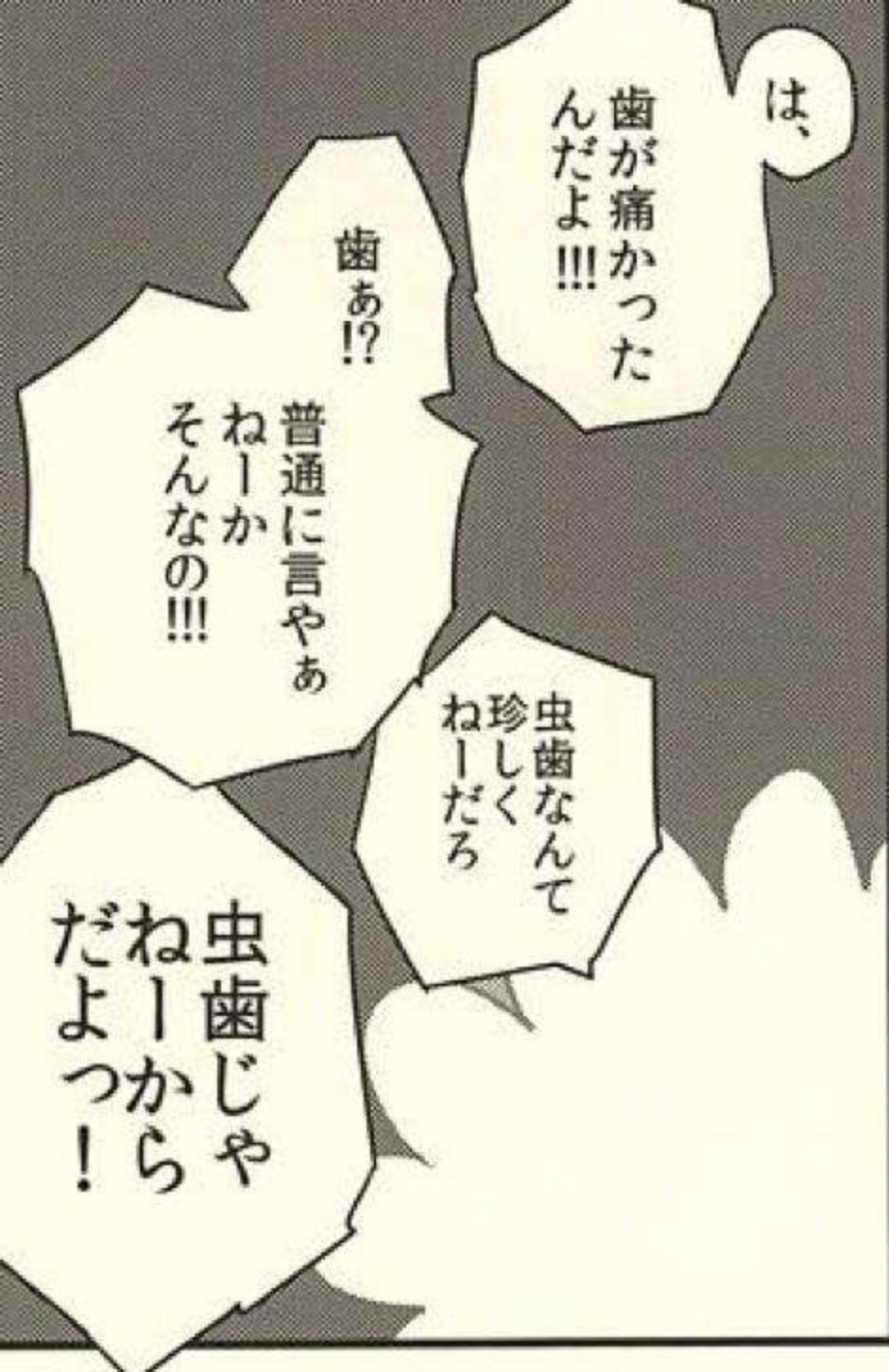


え...?  
だって青峰...

なんだよお前  
ひげ生えてん  
じゃん(笑)  
ほまじき

...ったく  
おまえさあ





かつこ悪い  
ことあるかよ

——もう  
痛くねえの？

おう、今朝  
歯あ磨いてたら  
抜けた



すー……



ヒゲ  
ちくちくして  
気になる

ちよつと  
来い

カミソリ  
どこ？

風呂場

ひげ……っ  
剃りに、来たのに

うん

……つうんじゃ  
ねえ……っ！

スズキ

うあつ……

つて……  
あつ……おいっ

カミソリ



青峰だって

その気  
だったくせに

あ  
あ

なあ

前弄らないで  
イってみよーぜ?

キ  
ュ

ア  
ア

ク  
ク  
ク

は  
あ  
う  
ん

あ  
あ

あ  
あ

ム  
リ  
デ

ク  
ク  
ク

ク  
ク  
ク









おれも、  
青峰の中...やばい

大丈夫...う...

寝そろう



あー!!

↓  
寝そろう



踏ま

ズンズンズン

ズン!!  
ズン!!



つかもネー  
何なのおと削っ  
死ねん

水飲まね  
じゅんじゅん  
...

うう...  
ここ数日全然  
寝てなくて...

ああ

おう、  
ありがとな

...

つかそれ  
俺のジーンズのケツに  
入ってたんだけど

あとほら!  
コレちゃんと  
しとけよ!

大事なもん  
なんだろう?

チヤウッ

シブーンと寝てた



ああ

青峰が急に  
会わねーとから  
言い出したから  
慌てて  
突っ込んだ

気付いたら  
返しに家に  
来るだろうし

なりふり構って  
らんねーじゃん

青峰相手に  
おれ  
してんだぜ?

姑息か!

天然なのが  
計算はのか  
かかんちゅん

☆



み  
◆  
でき  
て

ナニヲ  
シユ  
カ  
ス  
ル  
ノ  
...

く  
っ  
...



俺が火神の前で  
カツコつけたくて  
必死なの  
バカみてえじゃ  
ねーか...

全  
然  
...



俺、火神の  
そーゆーとこ  
キライ

えっ

「なあ、早く見せてくれよ」

「……ッ」

見上げる火神は楽しそうだ。からかう表情、しかしその瞳の奥には情欲の火を灯し、まるでいつ獲物に食らいつこうかと舌なめずりをする獣のようだ。

かすかに震える膝頭を叱咤し、火神に悟られまいと床を踏みしめる。

「なあ、青峰、……」

イヤだ。イヤだ……

首筋を汗が伝う。喉がひりつく。口の中の唾液をかき集め、必死に飲み下す。火神の赤い瞳から目が離せない。

「ほら、早く」

イヤだ。

気持ちとは裏腹に、震える指先は自らの下腹部に伸びていく――

\*\*\*

「ふう〜。うわ、部屋ん中あつちい！」

「あー、ベットベトで気持ち悪い」

マンションのドアが勢いよく開き、我先にと一九〇超の男二人が部屋に転がりこむ。エアコンのついていない部屋はさながらサウナのようだが、それでも八月の直射日光に炙られるよりはマシだ。

火神はいったん窓を開けて風を通し、エアコンのスイッチを押した。

「青峰、服は洗濯機に入れておいて。洗っちゃおう」

「マジで」

「この気温ならすぐ乾くだろ」

「おー、サンキュー。シャワー借りるな」

「おう」

青峰は火神から差し出された麦茶を啜り、「もう一杯」とおかわりした。一息ついて浴室へ向かう。火神はその後ろ姿を見送り、自分も麦茶を一気に飲み干す。ぐっしりと汗を吸ったTシャツを脱ぎ、まずは浴室横の洗濯機に向かった。

夏休み中もお互い部活三昧だが、今日はたまたま休みが重なった。部活終わりにストバスコートで一戦交えたり、マジパーカーで軽くだべったりはしているから、会うこと自体が久しぶりなわけではない。けれど、丸一日を一緒に過ごせる日は貴重だった。

火神と青峰は年が明けてしばらくして、つきあうことになった。

ウインターカップの後からちよくちよく黒子と三人でストバスに興じていたが、あるとき「僕、もうつきあいきれません」と黒子が真面目な顔で言い出すのを、二人してぼかんと見つめた。

「なんだよテツ、もうリタイアか？」からかう青峰に、「……どうやら鈍感なのは青峰くんだけのようですね、火神くん」黒子は呆れ顔でため息をつく。はあ？ と訝しげに火神の顔を振り返った青峰が自覚したのはまさにその瞬間で――

年度が変わり、二人は後輩をもつ身となった。練習の仕方、チームでの役割も変わってくる。火神の活躍に憧れて入部した者も多く、誠凛高校バスケット部の部員数は相当な数になった。面倒見のいい火神は後輩に慕われ、部活後個別練習につきあうことも多い。それでもなるべく青峰と連絡をとりあい、時間が許せばストバスをする。そんな日が多くなっていた。

スタートボタンを押し、洗濯機が仕事を始めるのを見届けてから、火神は浴室の扉に手をかけた。

「あーおみね」

「うおっ」

火神は頭を洗う青峰の背後から体当たりする。

「てめ、あぶねーじゃねーか！」

泡が入らないよう、ぎゅつと目を閉じたまま青峰が怒鳴る。

「つか、入ってくんなようぜー」

「ここ、オレんちなんだけど？」

「へいへい」

ぶちぶち言う青峰にクスリと笑い、火神も軽くからだを流す。頭を洗い流しブルブルと首を振る青峰の背後から、ボディソープを泡立てた手で抱きついた。

「っ、なに、」

「洗ってやるよ」

「いいって」

青峰の背にびたりと胸をつけ、火神は泡でぬめる両手を青峰の胸から腹に滑らせた。バランスを崩しそうになる青峰の足が床の上を滑り、ピシヤ、と音をたてる。

「おまつ、くつつきすぎなんだよ！　つか、手つきがエロいんだよ！」

「エロくしてんの」

火神の掌は青峰の筋肉の稜線をなぞり肩から腕、わき腹から胸へと、水滴を弾く褐色の肌を縦横無尽に動き回る。たまに隆起した胸にある小さな粒をかすめ、青峰が小さく息を詰めるのを楽しんだ。

火神は青峰の耳殻が赤くなっているのが、シャワーの湯温で温められたせいでないとわかっている。口角を少しあげると、耳の後ろに吸いついた。

「っ……」

「青峰」

火神は青峰の肩に顎を乗せて覗きこんだ。頬を上気させてこちらを睨みつける瞳が揺れている。お互い言葉もなく唇を寄せるが角度的にそれは深いものにならず、まるで初めてのキスのようにぎこちないものになった。

火神はキスを諦め、青峰のうなじをべロリと舐める。青峰はのしかかる重みによるけ、壁に片手をついた。

「重いつつの」

「……」

「ちよ、そこまではいいって……、」

火神の手が下腹部に伸びるのを察知し、とっさに身をよじる。しかし火神の手は青峰の下生えをかすりはしたが、青峰の危惧する場所を避けそのまま外腿から腰へと移動する。

安堵の息を小さく吐き、「もういいだろ、どけよ」と肘で腹を小突く。

「青峰、勃ってる」

「う、るせ……」

そう指摘する火神自身もすでに昂り、青蜂の尻の狭間をこすっている。もちろんそれは中に潜りこもうとする動きではないが、まるで条件反射のように青蜂の後孔はかすかに収縮してしまふ。

ぐりぐりと腰を押しつけながら、火神の手が青蜂の下腹部を這う。  
「な、しよ？」

「……」

「こんなゆっくり会えるの久しぶりじゃん。超ご無沙汰ってやつ」

「ばあか」

「我慢できねー」

「あつ、てめ、」

火神は青蜂の制止をきかず、耳朶を甘噛みしながら胸にある粒に指を伸ばす。ボディースーツで滑りのよくなった指による刺激は弱く、穏やかな快感を導き出す。器用な指は円を描くように撫でたかと思うと、爪を立ててコリコリと刺激する。

「んっ、はっ……」

青蜂は壁に両手をつき、火神の手から逃れようと身をよじった。

「ここですんの」

「どうせ汗かくし、よくね？」

「ったく」

青蜂はなにかば諦めたようにため息をつき、振り向いて背を壁に預けた。向かい合う火神のせっぱ詰まった顔がなぜかおかしく、青蜂はかはっと息を吐いた。火神は「ずいぶん余裕だな？」楽しそうに睨みつけ唇を寄せる。火神の熱い舌が青蜂の舌をとらえ吸いつき、歯列をなぞり、舌の裏の壁を舐める。青蜂の背筋を甘い快感が駆けあがる。青蜂も、迎い入れた火神の舌を絡め取り、もっとよこせと吸いあげた。火神のからだは少しこわばり、腰から臀部へと手がまわる。互いの唾液が混ざり合い、溢れ、顎をつたう。名残惜しげに顔を離した火神は、帰国子女よろしく青蜂の口の端に、頬に、目尻に、軽くキスを落とした。青蜂はこのキス

が初めは照れくさくて苦手だったが、火神がひとつも照れていないのにムカついてあえて平気なふりをしていたら慣れてしまった。今では言葉よりも雄弁な、火神の愛情表現として受け入れている。

「ま、ご無沙汰なのはほんただな。ほとんどお前のせいだけだ」

「悪いと思ってるって」

「謝ることねーよ。いいじゃねーか、火神先輩？」

「うるせっ」

青蜂はからかいの笑みを浮かべ、火神の足下にしやがみこんだ。

「あおみ、」

「火神さんちの大我くんは元気ですわね」

「あつ」

青蜂は火神の屹立を握りこんだ。みっちりとした肉の弾力を楽しむかのように指先に力を入れたり弱めたりしながら、べろりと口の端を舐める。火神はごくりと生唾を飲み、捕食される小動物のようにおとなしくその様を見つめた。

青蜂は火神から目を離さず見せつけるように舌を伸ばし、先端にじむ透明な唾をすくいあげた。青蜂が自分からこの行為をするのは珍しい。火神は腰背部に甘い痺れを感じながら、よけいなことを口にして青蜂の気が変わらないように黙って見守った。

青蜂は片膝をついて火神の太股に手を添え、陰囊から茎を舐めあげる。好物の菓子を差し出された子どもが、すぐにでもかぶりつきたい衝動を抑え、楽しみを長引かせようとするかのようにゆっくりと舌を這わせる。

「あお、みね」

火神がねだると、青蜂はいたずらっ子のような上目遣いを見せてから深く啜えこんだ。青蜂の薄い唇は一見冷たい印象を与えがらだが、その口内が濡れて熱いことを火神は知っている。それはまるで本人のバスケットへの情熱のようだ。青蜂はねっとりとし舌を絡ませながら、じゅっじゅっと頭を上下して茎を絞りあげた。



火神は腰にたまる重たい快感に耐えながら、青蜂のつむじを見つめた。素直に螺旋を描く深いブルーの髪を撫で、耳の後ろに手を滑らせ、指をそつと耳の孔に潜りこませる。ぬふぬふと挿挿するかのように入りする指に青蜂はぶるつと身震いをし、やめろといたげに肩をひねった。火神の余裕のない顔が見たくて始めたはずの行為は、いつしか青蜂自身の性感を自ら刺激するものになっていった。青蜂はふうふうと鼻から吐息を漏らしながら、夢中で火神のものを舐めしやぶった。

「はっ……、やべ」

火神は腰の角度を変えて青蜂の上顎を強くこすりあげた。喉奥を抉ると、青蜂は快感と苦痛に顔を歪める。両の掌で青蜂の頭をホールドし、喉奥への刺激を繰り返すと、青蜂は火神の太股に添えた手に力をこめてそれに耐えた。普段不遜な態度で周りを翻弄している青蜂が、男の屹立を唾えこみ感じている。こんな姿が見られるのは自分だけなのだ。火神はどうしようもないほど、幼稚な独占欲が満たされるのを感じてしまう。

「イ、く」

深いため息を漏らすと、青蜂は目を閉じたまま喉奥を絞った。

「んっ……」

腰が抜けそうになる快感に耐えながら、青蜂の口内に吐精する。青蜂は火神の脈動が落ち着くのを待ってから顔を離し、口元を掌で押さえた。

「はー。ごめん、我慢できなかつた」

「……」

「出して、それ」

「ん」

「おま、」

「飲んじまったよ、とっくに」

「お前なあ」

青蜂が不敵な笑みを浮かべるのに、火神はまた下腹にうずきを感じてしまう。互いの濡れた瞳がぶつかり合い、自然と顔が近づいて深く唇を

合わせる。

「やべ、すげー興奮してるわ」

「青蜂のガチガチじゃん」

「お前も出したばっかなのにフツカツはえーよ、んっ」

火神は青蜂の昂りを握りこむ。軽く息をあげる青蜂の肩越しに、「ちよつと待って」とシャワー横にある櫛に手を伸ばした。火神が手にしたのはジェルのチューブだ。

「お前そんな風呂場に置いてんの？」

「これ風呂用。別に、お前しか来ないし」

「テツとか」

「黒子はたまに来るけど、風呂には入らねーだろ」

火神はジェルで濡れた手を青蜂の尻の狭間に滑らせた。そこは固く閉じ、火神の指を押し返そうとする。

「……ッ」

「固いな」

「あ、たりまえだろバカ」

「力抜けよ」

「くっ、おま、無理言うな……」

火神の濡れた固い指先がそこをノックする。青蜂は片足をバスタブに乗せて火神に掴まった。火神は片手で青蜂の屹立を握りゆるゆると刺激しながら、陰囊から会陰をなぞり、ゆつくりと窄まりに指を沈みこませていく。

「ん、あつ、」

「青蜂ん中、あつっい」

「くっ……、やだっつーのに……」

「なにが？」

首筋に歯を立てる火神の頭に青蜂は手を滑りこませる。

「自分で、」

「なに、お前、自分でやわらかくするつもりだったの？」

「はつきり言うんじやねえ、……んっ、」

久しぶりに一日中、一緒にいられるのだ。青峰とて期待しないわけがなかった。だがこの行為はとてつもなく恥ずかしい。いつものようにベッドに入る前に、自ら処理するつもりだった。なのにこいつときたら……

「お前、オレの楽しみ奪うなよ！」

「はあ？ くっ、あつ」

「ここは、オレがやわらかくしてやりてーの。全部、イチからオレがやるのがいいんじやねーか」

「あ、あほか。んっ」

潤ませた瞳で睨みつける。男として後ろで同じ男を受け入れることは、恥ずかしさ以上にいたたまれない気持ちになる。女なら難なく受け入れられる器官が男にはない。女になりたいわけではないが、よりスムーズにコトに入れるほうが互いのメンタルにいい気がしていた。だが今日みたいにひとりの時間がとれないときは、嬉々として火神がその役を担おうとする。そういうときの火神の顔を見ると、こちらがいろいろと考えているのが馬鹿らしくなる。

火神の指はいつの間にか二本、三本と増えていた。内臓を直接撫でられる悪寒とも快感ともつかない感覚に震えながら、口内に潜りこんでくる火神の舌を必死にむさぼった。

「だいふ、やわらかくなってきた」

「んう、ふうっ……。かがみ、も、」

火神は器用な手つきで青峰の昂りを根元からしごきあげた。ジェルを足しながら指をピストンし、ぐるりと入り口の輪を広げるように指を回す。

「うああっ……！」

「っと、わり。オレも限界」

いったんからだを離し、火神は反り返る自らのものにもジェルを垂らし、二度こすってなじませた。青峰は震える足でどうにか体勢を変えて壁に手をつく。

「青峰、入れるぞ」

「ん、あ……、」

「さつき出したから、もつぜ」

「うるせ、さつさと……」

火神は青峰の尻を割り開き、表皮より色の濃いぼつてりと収縮する乳に自らの怒張をあてがった。みちみち……と少しずつ肉の輪に飲みこまれていくのを見るだけで、さらに火神のものは太く固く変化してしまう。

「あ……あ……」

「ッあー……」

青峰の尻たぶと火神の下腹がばちゅり、と音を立てる。青峰の指がタイルの白い目地を引っかいた。

「はっ……、すげ……」

「うあ、かがみ……」

「気持ちいい？」

「すげ……、やべえ。アッ！」

火神はゆっくり腰をぎりぎりのところまで引くと、最奥に打ちつける。

「んああ……」

仰け反り、背の溝を汗が滑り落ちる。火神は青峰の肩口に唇を寄せて汗を吸った。次第に腰を打ちつけるピッチが速くなり、パンパンと肉のぶつかる音が風呂場に響きわたる。

「あつ、やつ、つよ、ん、んっ」

カクカクと青峰の膝が震え、必死で壁に縋りつく。立っているのもやっつとだというのに、後ろから火神がのしかかる。耳裏をねっつりと舐められ、耳朶を食まれ、耳の孔に舌を差しこまれ、水音が脳を刺激する。

火神の両手は前に回り、なだらかな胸筋の突端にある小さな粒をこねく

り回す。その刺激はダイレクトに後ろとつながり、濡れた髪は火神の熱い杭にからみついた。火神のもう片方の手は絶え間なく透明な雫をたれ流す青峰の屹立をとらえ、ゆっくりとストロークされる。一度にふりかかる快感に翻弄され、青峰は身も世もなく声が出てしまう。

「青峰、いきそう？」

「ああっ、あっ、あっ、ダメだ、イ……！」

火神は青峰のうなじにキスを落とすと、ぐっと腰を引き寄せて張り出したエラでくるみ状の器官をゴリゴリと潰した。同時に加えられる屹立への刺激も止まらない。青峰は強い刺激にヒュッと思を吸う。

青峰は両下肢をこわばらせてからだをかすかに痙攣させると、脱力して壁に頬をついた。火神は掌で青峰の温かい白濁を受け止めながら、腹に回した手で重いからだを支えてやる。

息を荒げて肩を上下させる青峰の横顔をしばらく見つめていた火神は、腰の動きを再開させた。青峰がゆっくり振り返る。

「な、おま、オレ、イったんだけど、なに……！」

「うん、けどオレまだイってねーし」

「！　そうかもしれないけど！　ちよ、っと、まっ」

火神は青峰のものを握りこんだまま、パンッパンッと容赦なく腰を打ちつけた。達したばかりで敏感になっている粘膜への刺激と疲労感に震え、青峰は「ま、待ってって！　火神！」訴えても火神は腰を止めようとしなない。

「すげ、青峰ん中ぐにぐに動いて吸いついてくる」

興奮し少しうわずらせた声が背後から聞こえ、からだの内側にさざ波がたつ。青峰の白濁で滑りがよくなった手で、まだ芯が残るそこを上下にこすりあげられる。痛いぐらいの刺激に青峰は焦った。

「おま、待ってって、ちよ、手え離せよ！」

震える手で火神の腕をふりほどこうとするが、敏感になった龟头を親指の腹でぐりぐりと揉まれ、痛みと快感に力が入らない。火神の怒張で

最奥を削られ、指で龟头裏のスリットをこすられ、青峰は頭がパニックになって目尻から涙をにじませた。

「も、やめ、ほんとマジ触、んな……って！　あっあっ……！」

「青峰、あおみね、すげー、気持ちいい、すげえ……！」

「あっ、もう、やだっ、待っ、」

いつしか青峰の頭には霞がかかり、骨を抜かれたように力が抜けていく。倒れるわけにはいかないと、残り少ない理性がなんとか脚を叱咤し壁に縋りつかせる。青峰の中につぶりそそぎこまれたジェルが火神の先走り混ざりくちゅくちゅと音を立て、温められゆるくなって内腿に垂れてくる。中と龟头への強い刺激に再度射精感とも尿意ともつかないものが腰から背に向かって駆けあがる。ただならぬ感覚に青峰は焦り、「火神……！」と声をあげた。しかし絶え間なく喘いでいたせいとその声はかすれている。

「かがみ、やめ、なんか、変！」

「へん？　へんって？」

「わかんね、ちよっと、やば、なんか、やだ、やめ、……ッ」

火神は青峰の声に耳を傾けるが、手も腰も止めようとしなない。

「うああああ……！」

「青峰?!」

ぎゅんと中が蠕動し、火神のものを絞りあげる。たまらず火神は小さく呻き、青峰の中に白濁をまき散らした。同時に青峰のからだはこわばり、火神に握りこまれた先端からは透明の液体が勢いよく進む。

「えっ」

火神は脱力して倒れこみそうになる青峰を支え、自らのものをゆっくり引き抜いた。みっちり埋めこまれていたものが去っていく心もとなさのせいか、青峰の後孔は勝手に収縮し、その刺激がまた快感となって青峰はブルリと震えた。火神は自分の余韻よりも何よりも青峰の異変に驚き、マイルに寄りかかってピクピクとからだを痙攣させる青峰の顔を

覗きこんだ。

「だ、大丈夫か、青峰」

「あ……、うう、……」

まるで短距離走を全力で走ったかのように忙しなく息を吐き、涙と唾液で顔面を濡らす青峰の瞳は焦点がまるで合っていない。ビクビクと揺れる青峰の先端からは、未だちよろちよろと雫がこぼれ落ちていた。

「あ……、オレ、なん、」

「大丈夫か。具合、悪くなったか？」

涙ごと頬を撫でられ、恍惚と目を細めた青峰は、次の瞬間ハッと下半身に顔を向ける。そして自らのものを握りこんで隠した。

「お前、なんかいま、すごかったな」

「……」

「もしかして、漏らした？」

「み、見んじやねえ！」

「なんで」

火神は青峰の手首を掴むと鼻を近づけ、掌をべろりと舐めた。カアツと頭に血が昇り、思わず横つ面をたたいてしまう。

「イツテェ！……オシッコじやねーみてえだな」

「おま……、おま、信じらんねえことすんなバカ！」

怒りと羞恥で真っ赤になりながらも、腰が抜けたように起きあがれない。

「もしかしてこれって、……潮とかいうやつ？」

「しお？」

知識はないが、なんとなく聞いたことはある。男でも潮をふくことができる。まさかさっきのが潮だということか。

青峰は目眩がした。いったい自分のからだはどうしてしまったのだろうか。

\*\*\*

「はあ……」

青峰はため息をついてベッド下に雑誌を放り投げた。もやもやとした気分は、大好きな堀北マイのグラビアでも晴らすことができない。

あれから二週間、火神とは会っていない。相愛わらずお互い部活で忙しかつたから、どうせゆっくり会う時間はない。火神は夕飯だけでもメールを入れてくることはあったが、適当な理由をつければ断ることができた。

潮をふいたと思われる日から、セックスをするのが怖い。あの瞬間のことはよく覚えておらず、頭がぼうつとして全身に快感が駆けめぐって、自分のからだなのにコントロールができなかった。完全に自分の意識とからだから乖離した感覚……。またあんなことになったらと思うと、恐ろしい気持ちになる。でも、だからといってこのまま火神と会わないわけにはいかないだろう。

階下から母親が風呂に入れと促す声が聞こえる。青峰はぞんざいな返事をし、思考を切り替えようと頭を振った。

起きあがるのと同時に、傍らの携帯が着信音を鳴らす。確認すると火神だ。青峰は一瞬躊躇したが、応答ボタンを押した。

「……はい」

「もしもし、オレ。火神だけど」

「……おう」

「なんか久しぶりだな。忙しいか？」

「まあな」

「ふうん。今週末は？ 会えそうか」

「……」

「青峰？」

「さ、さつきの、つきあいで出かけっから」

『そっか』

「……」

『……』

「……」

『……あのさ、お前、オレのこと避けてる？』

「は、」

『いや、気のせいならいいんだけどさ』

「避けてねーよ」

嘘だ。火神に嫌な思いをさせたいわけじゃないのに、臆病になっていく自分がある。こんなの、自分らしくない。だけど……

『それならいいけど。なあ、オレはそろそろ会ってーよ』

「……恥ずかしいんだよめーは」

『……へんなこと言ってもいい？』

「なんだよ」

『お前の声聞いてたら、勃ちった』

「あ？」

『電話久しぶりじゃん。お前の声、エロいし』

「寝言は寝て言えよ」

『なあ、そのままなんかしゃべって』

「はあ？」

青峰はかすかに聞こえる衣擦れの音に目を見張る。

『お前、何してんだよ』

「……」

かすかな息づかいが聞こえ、心臓が跳ねる。携帯を持つ手には、いつの間にかじつとりと汗をかいていた。

『やべーマジで、お前は？』

「バカか。切るぞ」

『あー、やりてえ』

「……ッ」

火神はわざとなのかあけすけな物言いをする。青峰は思わず下腹に手をやった。少し熱をもち形を変え始めていることに戸惑う。枕に寄りかかり、服の上からなぞるとゆるい快感で腰が重くなる。

『青峰ん中、入りてえ』

「……っ」

鼻から抜けたかすかな声を、火神は聞き逃さない。

『もしかして青峰も触ってる？』

「んな、わけ……」

『はー、オレすげえガツチガチ。このままお前の声でイけそう』

「……アホ」

青峰もいつしか下着をずり下ろし、自らのものを直に握りこんでいた。目を閉じて、火神の息づかいに神経を集中する。気持ちいい場所は自分が一番わかっている。的確にそこを刺激しながら、火神の愛撫や息づかいを反芻する。

『青峰、聞こえる？』

「ん、……」

火神の吐息混じりの声の奥で、かすかな水音が聞こえる。火神が自らのもの——あの、太く血管の浮き出た、いつもオレの中をみっちり満たす——をこすりあげている。そう思うと、よりいっそう青峰のものも質量を増してしまう。

「ふう、んっ、」

『青峰の声、やべー。腰にくる』

「お前の声だって、……くっ、」

『今どこ触ってる？ 先っぼ？ すげー濡れてる？』

もっと音聞かせて、とねだられ、熱く猛る自らのものをこすりながら携帯を近づける。

『はっ。ぐちよぐちよじゃん。えっろ』

『うる、せ……』

『青峰ん中、熱くて、うねってからみついでくんの。気持ちいいんだよな』

火神の熱っぽい声に後孔がきゅんと収縮する。

『すげー入れてえ』

『そ、ういうこと、言うんじゃねえっ……』

『オレ、イキそう』

『んっ、オレも』

互いの息づかいが荒くなり、手元をせわしなく動かす気配にさらに煽られる。青峰は携帯を耳と肩で挟み、両手で自らのものを握りこんだ。火神が覆い被さり、耳に熱い息を吹きこみながらストロークする様を夢想しながら、めちやくちやに手を動かす。青峰自身、火神に会いたくないはずがない。本当は抱き合いたい。ただこの間のことを思い出すとからだがすくんでしまうだけだ。ない交ぜな気持ちと欲望で、本当はおかしくなりそうだった。溢れ出る先走り指の間から重れるのもかまわず、強めに刺激する。フィニッシュが近づき、うちにこもる熱が台風のようにからだの中を駆けめぐり、ひとつの出口を目指して疾走するかのような錯覚に陥る。

『あっ、青峰……！』

『火神……ッ』

互いが同時に白濁を吐き出す。青峰は両の掌で受け止めながら、ぐったりとベッドにからだを預けた。携帯の向こうでも、火神が息を荒げているのが聞こえる。その息づかいにさらに劣情の火が灯りそうになる。

『な、青峰』

『……なに、』

『自分の、さわってみて』

『なんで、もうイッたし』

『音聞かせて』

『バカかてめーは……』

悪態をつきつつも、まだ体内にはどろりとした熱がたまっている。

白濁ですべり、固さを保つそこを、ゆるゆると刺激する。くちゅ……と水音がたち、頬が熱くなる。

『先っぽ強くこすって』

『イッたばっかだからいてーって……』

なんとなく言われるがまま、亀頭を刺激する。通常よりも敏感になったそこに痛みを感じて少し腰が引けてしまうが、ぬめりに助けられてくるくと刺激してみる。

——ぶしゅっ、

『あ？』

『え？』

『んあっ、あ……！』

青峰は驚いてぎゅっと先端を握りこんだ。が、ビクビクと腹に力が入るのに合わせ、透明な液体がビュッビュッと溢れ出し、指の間を伝って尻へ流れていく。

『ああああっ、んう——』

『青峰？ どうした？！』

ただならぬ気配を感じたのか、火神が焦った声をあげる。青峰はそれには答えず、濡れそぼった震える指で携帯の通話ボタンを押した。

一転部屋は静まり返り、自らの息遣いだけが耳につく。青峰は濡れた掌をじつと見つめた。この間と同じことが起きた。いや、この間よりも状況は悪化している気がした。

どうしてこんな——意思とは関係なく得体の知れないものを漏らしてしまうのが、とてつもない罪悪感と絶望感を青峰に与えていた。

携帯の着信音が鳴る。火神だ。

青峰は目尻に涙のため、じっと着信画面を凝視した。

土曜の午後、青峰はほかの部員の挨拶を背に、いち早く部室を出た。

あの晩は結局、「親がうるさいから今日はもう寝る」とだけメールを送信し、火神からの着信は無視を決めこんだ。実際、風呂に入れと催促されたのは事実だ。しばらく動くことはできなかったが。

「青峰」

校門を出たところで背後から耳なじみのいい声が聞こえ、ギクリと足を止める。

振り返るとまだ高い位置にある太陽を背に浴びて、火神が立っていた。逆光のせいか赤い髪の先が光り、熱を帯びたオーラを纏っているように見える。実際、火神の強い瞳には怒りが滲んでいたのだが。

「……火神」

「今日は部活、早く終わる日だろ。この後も何も無いんだろ？」

「くそっ、さつきか」

火神は黒子経由で桃井に今日の練習メニューを訊いたのだろう。今日は学校の都合で部活が早く終わることが、事前に決まっていたのだ。

「お前が電話もメールも無視すつからだろ」

「無視してねーだろ。メールには返事してるだろうが」

「あんなの返事のうちに入るかよ。お前、いったいどうしたんだよ」

「……どうもしねーよ」

かまわず早足に歩く青峰の肩を、火神が掴んで引き戻す。

「帰るぞ」

「おー。お前も帰れ」

「ちげーよ！ オレン家に帰んだよ！」

「あ？」

火神の部屋——青峰の脳裏に発端であるあの日がよぎる。瞬間、背筋

に甘い痺れを感じるのに狼狽する。

「マジでお前ふざけんな」

抗い後ずさりする腕を強く掴まれ、逃がさないといわんばかりに睨みつけられる。火神がここまで怒るのは珍しかった。このまま火神と向き合えないのは、青峰も本意ではない。青峰は素直に従うことにした。

マンションのドアを乱暴に閉め、火神は青峰の手首を掴んだまままっすぐ寝室へ向かった。リビングではなく寝室などところに、鼓動が速まる。

力任せにベッドに突き飛ばされ、青峰はとっさに受け身をとって肘をついた。「つてえな……」からだを起こそうとする青峰の上に、火神は馬乗りになる。

「青峰」

火神は、青峰の両手首をとらえてシーツに縫いつけ、じつと上から見下ろした。

「なん、」

「青峰、お前何考えてる？」

「……なんも、考えてねーよ。どけよ」

「セックス、すんぞ」

「ッ……。今日は嫌だ」

「いつならいいんだよ」

「知るかバカ。宣言してすることじゃねーだろ。ムードとか考えろ」

「ぶはっ、ムード？ お前がムードとか言っちゃう？」

「うっせ！」

火神の手にさらに力が入り、手首を動かそうとすると痛みが走る。バカが、使いもんにならなくなったらどうしてくれるんだ。そう文句を言

「いたい、赤い瞳に射すくめられ言葉が出てこない。」

「青峰」

「い、やだつて！」

「不安に思うことねーから」

「はあ？」

「火神は何を言っているのだろう。オレが不安に思うって？ オレの態度で不安になつてるのはお前のほうじゃねえのか。火神は青峰に覆い被さり、唇を重ねる。」

「口、開けよ」

「……」

強く引き結んだ唇を、火神の親指がなぞる。至近距離で鋭い視線が交差する。火神のぐりぐりと指を潜りこませる動きに、たまらず青峰は薄く唇を開いた。火神はすかさず指を潜りこませ、すき間に舌をねじこんでくる。

「んむう、んっ……」

火神の厚い舌は我が物顔で青峰の口内を蹂躞する。上顎をこすられ舌の先を軽く嘯まれて、ビリビリと電流のようなものが背中を駆けあがる。

青峰は、自由になった手で火神のシャツを掴んだ。

長い長いキス。何度も角度を変え、互いに無言で口内をむさぼり合う。

火神の手は青峰の頬から耳、こめかみを撫でさする。激しいキスとは裏腹なそのやさしい掌に、青峰の胸はじわりと熱くなった。

やっとな顔を離れたときには互いに頬が紅潮し、息があがっていた。

青峰はぐったりと火神の顔を見上げた。

火神は寝狂な獣の様子を窺うハンターのように、慎重に青峰のシャツのボタンをはずしていく――

「んっ、あつ……！ も、や、やめ、」

揺すりあげられる青峰の下腹は、自らが吐き出した白濁でぐっしりと濡れていた。さらに、青峰の後孔からは火神の白濁とジェルが混ざった生温かい粘液がこぼりと漏れ出し、にちやにちやといやらしい音をたてている。

火神は青峰の膝裏を抱え、太く熱い杭を最奥まで捻じこんだ。青峰は片腕で目元を覆い、開きっぱなしの唇からハッハッと短い呼吸を繰り返す。

「青峰、また勃ってきた。すぐイキそう？ 中すげーうねってる」

「くっ……、うっ、無理、やめろ、マジ、で……ひっ！」

火神は青峰の胸にまで飛んだ白濁を、しつこく吸われぼつてりと色を変えた乳首に塗り広げ、クリクリと弄んだ。そしてその手はわき腹を辿り、下生えに溜まる白濁もろともに、はちきれそうな青峰自身を握りこむ。

「あつあつ、さわ、触ん、な……！ んんっ」

「うわ、かっつえ。こっちも……すげ」

火神は腰を引いて自らを飲みこむ青峰の肉の輪を覗きこむ。そこはすつかり火神のかたち姿を変え、けなげに食いしめようと蠕動している。

火神は指でその輪郭をなぞり、少しだけ縁に指先を潜りこませてみる。すると忘我の淵にいるかに見えた青峰は、不安げに顔を向ける。

「いつっ……！ やめろよ、広がっちゃうだろうが……！」

「わり。入るかなーと思つて」

「入るかバカ！ マジでやめろよ……んああつ」

火神は再度深く突き入れながら、親指で会陰をなぞりあげる。腹の中の敏感なくなるみ状の器官を外からも刺激され、青峰は目を見開いた。

「あつあつあつ、また、ま、イク……！」

「いいぜ、たくさんイけよ！」

もはや青峰の下半身には力が入らない。激しいピストンにあわせてプ



ラブラと脚が揺れ、青峰は濡れまいとするように枕の端を掴んだ。

イク——？

「あつ、や、イヤだ！」

「……おお、みね？」

襲いくる排泄感。これは射精なのか。まさかまた——

「か、火神、動くな！ やつ、ダメだ！」

「なに？ イきそう？」

「ちが、わかんない、漏れ、もれ、るっ——？」

「いいぜ、漏らせよ！」

火神はがっしりと青峰の両膝をホールドし、大きく腰をグラインドさせる。

「あつあつあつ……、やだ、やだっつて！ 離、せ！」

「大丈夫、心配すんな！」

「なに言っ、だいじようぶじや、な、い、や……だ……」

最悪の事態が脳裏に浮かび、快感と葛藤で頭がパニックになる。青峰はイヤイヤと首を振り、両手で自らのものを握りこんだ。

「大丈夫、下に敷いてあつから！ 安心して漏らせ！」

「かがみ、やだっつて！ あつ、そこ、深、ふか、い……っ」

「青峰、手、」

火神は力が入らない青峰の重い手首を股間からはずさせると、膨らんだ亀頭で中を抉る。青峰は受け止めきれない快感と得体の知れない排泄感に慄いた。

「んっ……、イツ——あああああ！」

「青峰！」

ふしゅっ、……ふしゅっ！

「あ……あ、ああ……っ」

ビク、ビクと腹を痙攣させ、透明の液体を撒き散らす。青峰は羞恥と絶望と信じられない思いで、だがどこか他人事のようにその様を見つめ

た。勢いよく飛んだ透明の液体は、火神の腹筋の溝をゆっくりと伝う。

それがたまらなく淫靡な様に思えた。

激しく胸を上下させぐったりと枕に頭を埋めた青峰の目尻からは、涙がひとすじこぼれ落ちた。火神もびっしりと汗をかき、荒々しい呼吸を繰り返す。火神がゆっくり腰を引くと、青峰の腹が上下するのに合わせて後孔からごぼりと白濁が漏れ出した。浅黒い青峰のものは白濁と断続的に吐き出される液体とで濡れそぼち、太股を伝ってシャツに大きなシミをつくっていた。

「青峰」

火神は青峰の目尻に溜まる涙をちゅつと吸った。

「……ヤダっつただろ」

「大丈夫」

「……なにがだよ！」

「防水シート敷いてあつから」

防水？ こいつは何を言ってるんだ？ まるで——しかし青峰の思考はまとまらない。

「そういう、問題じゃねーんだよ！」

じんじんとした余韻に全身を上気させ、力が入らないままに青峰は語気を荒げた。恥ずかしくて、火神の顔を見ることができない。

「問題ねーだろ」

「あ？」

「お前は、潮ふく体質だっつてことだろ」

「な、んだよそれ……」

「お前が最近おかしかったの、これのせいだろ？」

濡れて色を変えるシートを視線で示され、頭の芯が羞恥で熱くなる。

青峰は火神を睨みつけ黙りこんだ。

「実はさ、前からそんな気がしてた」

「え、」

「けっこう前だけど、青峰がいったあとにそういう……、シーツが濡れてんたってことが何回かあって」

「……？」

「もしかしてって思ったんだ。だからあの日、試してみた」

「ため……？」

「わり、風呂場ならいいかな、と」

「なっ……」

「たぶん、あれが引き金になって潮ふきやすくなったのかもしねえ」

「はあ?! じゃあ、てめえのせいじゃねーか!」

青峰は一発殴ってやろうとからだを起こしかけるが、よろけてシーツに手をついた。

まさか、自覚なしに潮をふいていたとは。火神はすでに知っていたのだ。この数週間悩んでいたのが馬鹿みたいじゃないか。青峰は逃げ出したい思いに身を震わせた。

しかもそういう体質だということは、これから先またこういうことが起こり得るといふことなのだ。そう思い至り、青峰は頭を抱えなくなった。

「どうすんだよ、てめえ……」

「オレはかまわねーけど」

「オレがかまうんだよ!」

「でも潮ふくとき、気持ちよくねえ? すげーよさそうな顔すんだけど」

「……」

気持ちよすぎて戸惑ってる顔がたまんねえんだよな、と火神は殴られないよう心の中で付け足した。

「それに、お前の場合体質もあつかもだけど、まず潮ふくってことは相手に心許してるってことだからな?」

「はあ?」

「お前がオレのことすげー好きで、心許してて、セックスが気持ちいい

ってことだろ? そんなん、オレは嬉しいに決まってるじゃん」

「死ぬ!」

なんとか復活した腕で枕をひっ掴み、火神の顔面めがけて思い切り投げつける。しかし火神になんなくキャッチされてしまう。

「とにかく、ごちゃごちゃ考える必要ねえってこと。お前頭よくねーんだから」

「てめえに言われたくねーんだよ、バ火神!」

たしかに、潮をふいているときは気持ちがいい——、かもしれない。実際は頭が真っ白になって何も考えられないのだが……。これからもこんな恥ずかしい思いをしなくてはならないのかと思うと、気が遠くなる。

だが火神の、絶対深くは考えていけないせに「オールオックだ」と言わんばかりの態度に、結局青峰は安堵し教わられてしまうのだ。

\*\*\*

「なあ、早く見せてくれよ」

「……ッ」

風呂場の床にしゃがみこみ、青峰を見上げる火神は楽しそうだ。からかう表情、しかしその瞳の奥には情欲の火を灯し、まるでいつ獲物に食らいつこうかと舌なめずりをする獣のようだ。

あれから、火神によって完全に潮をふくからだにつくりかえられてしまった。火神とのセックスではもちろん、マスターベーションをするときでもふいてしまうことが多くなった。もはや青峰にとって、潮をふくことはフィニッシュだけを意味するものではなくなっていた。

かすかに震える膝頭を叱咤し、火神に悟られまいと床を踏みしめる。

「なあ、青峰、……」

「無理。出るわけねーだろ」

「イヤだ。イヤだ……」

火神の視線が青峰のからだじゅうを舐めまわす。チリチリと灼かれるような錯覚に、短く息を吐いた。

首筋を汗が伝う。喉がひりつく。口の中の唾液をかき集め、必死に飲み下す。火神の赤い瞳から目が離せない。

「そんなことねーだろ。ひとりでもふけるようになったんだろ？ 見せて」

「……や、」

「ほら、早く」

「イヤだ。」

だが気持ちとは裏腹に、震える指先は腹につくほど反り返り、先端から液をこぼす屹立に伸びていく。

——イヤなのに、たまたま興奮してしまう。

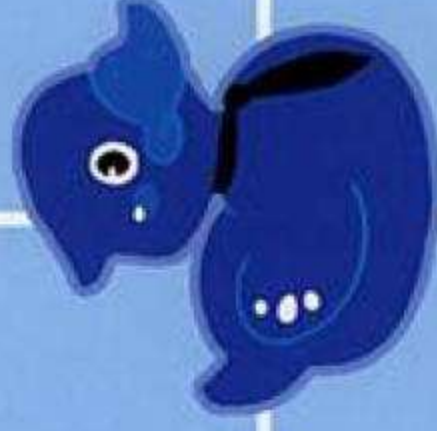
「また、かけてくれよ」

「かはっ、——変態かよてめーは」

互いの興奮しきった瞳がぶつかる。

青峰は唇を舐め、火神を挑発するかのように自らのものをゆっくりと舐めだした——

Honketsu-dopamine × UNSTOPPABLE Zone 2



**HAPPY BIRTHDAY!**

The basketball which kuroko plays  
unofficial fanbook #06